

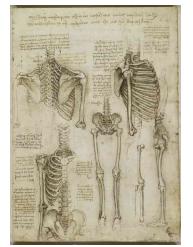
デザイナーのための経済コラム(62)

音楽と建築、ソナタ形式か対位法かミニマルか

交響曲の構成は長編小説のように、大河ドラマのように、またフルコースの宴会のように短編、小作品、料理のアラカルトの集大成のように思えます。そのような思うのはヨーロッパのルネッサンス(文芸復興)時代の人間中心の科学的発想、分析、分類的発想があると思います。この時代に、現代医学に通ずる人体解剖が始まっています。

レオナルド・ダ・ビンチは人体解剖図を書いています。また、音楽的な思考をしていたとも言われます。図書もあります。

<https://appletechlab.jp/blog-entry-474.html>



音楽之友社・1985年刊
「音楽家レオナルド・ダ・ビンチ」

レオナルド・ダ・ビンチの
人体解剖図

さらにそのもう一段掘り下げる、古代ギリシアの言語文化があるように思います。それは個人思想の自由な言語化、話し言葉による自己の表現手法としての弁論(speech)の手法として発展した多様なレトリック(修辞法・rhetoric)があったからと考えます。古来、宗教家、政治家、芸術家、文筆家、演出家はレトリックの名人です。レオナルド・ダ・ビンチのリンカーンの「人民による人民のための政治」はその典型です。

"by the people, of the people, for the people"

<https://ja.wikipedia.org/wiki/修辞法>

音楽の作曲手法の一つであるソナタ形式(Sonata form)とは「序奏⇒提示部⇒展開部⇒再現部⇒終奏」と説明されています。音楽のロマン派と呼ばれる人達は音楽的着想を言語的に表現したものと言えると思います。その代表的な作曲家はベートヘンやブルームス、ワグナーなどかと思います。彼らの作品には文学的な表題がついています。一方、古典派、ロマン派以前のバロック音楽では対位法という発想、形式が使われていました。それは音楽的部品を幾何学的、物理学的に組み合わせたり、変化させて音楽の感覚的な面白さをストレートに表現しようとするものでした。それは抽象絵画のように感覚を言語化する前の感覚を直接音楽にしたものだと思います。その代表的な作曲家はテレマン、ヘンデル、バッハなどで、モーツアルトは抽象から、具象(描写)への、過渡期の作曲家かと思います。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ソナタ形式>

ルネッサンス期のイタリアが起源と

される詩の形式に14行詩のソネット(sonnet)あります。ソネットは韻を踏むことが特徴になっています。ソナタ形式で作られている後期バロック音楽のビヴァルディの弦楽室内楽「四季」にはソネット形式の14行詩が付けられています。この詩は歌曲のような歌詞ではありません。

[https://ja.wikipedia.org/wiki/四季_\(ヴィヴァルディ\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/四季_(ヴィヴァルディ))

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ソネット>

絵画の分野では、ロマン派の時代、レンブラントやフェルメールは視覚を言語的に認識して写実的に言語的に描いています。20世紀初頭、絵画を純粋に視覚的に、色彩と、形で構成する作家が出てきました。カンジンスキイ、ミロ、マティス、ポロックなどです。カンジンスキイは自分自身の具象的な絵画の向きを横向きに置いたことで、偶然、新しい感覚を見付けたと言っています。日本では伝統的に抽象的な概念を鑑賞する背景に吉原治良をはじめとする人達がいました。

漸減(小)による
遠近法の構図
並列対称による
対位法の構図
レオナルド・ダ・ビンチの
「最後の晩餐」



交響曲の文学的言語的表題例

ベートヘン・第3番⇒「英雄」

ベートヘン・第5番⇒「運命」

ベートヘン・第6番⇒「田園」

チャイコフスキイ・第6番⇒「悲愴」

マーラー・第1番⇒「巨人」

バッハ・オルガン曲の表題例

BWV・525⇒トリオ・ソナタF#1番変ホ長調

BWV・526⇒トリオ・ソナタF#2番ハ短調

BWV・531⇒前奏曲とフーガ ハ長調



『和声と創意の試み』の初版(1725)の
最初のページ。

第1番「春」のヴァイオリン独奏パート、



フェルメール



カンジンスキイ



ミロ



マティス



吉原治良



嶋本昭三



上前智佑

交響曲が作曲され、演奏するには、楽器の進歩と製造、演奏者、大きな会場と観客が必要だったはずです。その条件を満たしたのが王宮や教会に代わって、オペラ劇場、歌劇場、楽劇場であり、貴族や新興の中産階級であったと推測します。音楽形態の進歩、変化発展が、近世ヨーロッパでは台頭し始める産業革命による経済力の拡大に合わせて、産業構造も、雇用形態も、生活様式も変わっていったはずです。



ミラノ・スカラ座・1778年開館



ウィーン国立歌劇場・1869年竣工



18・19世紀に作曲され、同時代に建築された劇場（シアター）で演奏されていた音楽は、その時代の現代音楽だったはずです。20世紀、21世紀に新しいスタイルで劇場（コンサートホール）が建築されても、それ以前の音楽はクラシックとして好まれ、継続的にそして新しい解釈で演奏されています。新しい感覚の音楽は新しい感覚の空間で演奏されるようになってきたと思います。「新しい酒は新しい皮袋に」かと思います。



ベルリンフィルハーモニー・外観、内部



悉尼・オペラハウス・外観、内部



サントリーホール・内部

日本では17・18・19世紀、交響曲やオペラのような芸術様式とは異なる歌舞伎、淨瑠璃、能楽が生まれ、発展し、劇場も様式として定着しています。入れ物と中身の感覚的な整合性はあるように思います。



歌舞伎座・外観、内部



国立能楽堂・外観、内部



音楽や言語などを構成する要素に分解し、構成や関係を考える手法は様々な分野で応用され、それら全体を「構造主義」と呼んでいるようです。表面上はそんな流れとは全く異質な流れが音楽にあります。その起源は音楽の起源ともいえるものです。現代的に作曲したのがラベルの「ポレロ」かと思います。由紀さおりの「夜明けのスキット」、ラフマニノフの「ポカリース」、久石譲の「風の谷のナウシカ」にミニマル音楽を感じます。その発想法はデジタル技術、遺伝子工学、AI技術のようにも見えます。起承転結の無いエンドレスのような音楽です。



遺伝子構造

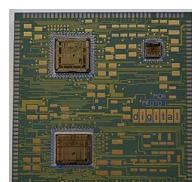
<https://ja.wikipedia.org/wiki/ミニマル・ミュージック>



集合住宅



分譲住宅



集積回路



アンディー・ウォホール



草間彌生



五百羅漢



(エリカ)混声合唱団



運転指令所



LED信号機



日本の国会

音楽形態の変遷と造形芸術の変遷を比較してみました。

(T. K.)